

離れて暮らす高齢者を身近にする
家族コミュニケーションツールの開発
古西 政樹 (21111130mk@tama.ac.jp)

1. 目的

本研究の目的は、離れて暮らす高齢者とその家族との間に定期的なコミュニケーションを可能にすることである。

現在では Skype や LINE が普及しているが、高齢者がこれらを使いこなすには時間がかかる。そのような負担をかけずに離れた家族と会話ができるように、家族コミュニケーションツールを開発する。

2. 手法

このツールは、スイッチが反応したら通話を接続し、一定時間会話を可能にするものである。

高齢者の家には、発信するためのスイッチとなるセンサ、スピーカー、マイクを設置する。家族の家にはマイクとスピーカーを設置する。高齢者が帰宅しセンサが反応すると、家族の家へ自動発信する。発信が行われると、会話をするのが可能になり、一定の接続時間が経過後に、自動的に接続が切断される。会話を継続するには、自宅の電話や携帯電話を使用する。

自宅の電話や携帯電話に比較して、この装置では会話のきっかけ作りが容易な特長がある。携帯電話などで高齢者に電話をかけると、元気かどうか尋ねて終わってしまい、そのあとの会話

が続かない場合がある。この装置を玄関に設置した場合、帰宅時であるという状況に限定されるので、どこに出かけていたのかを聞くことができる。

また、このシステムでは、1回の接続時間が制限されている。高齢者は、会話が成り立ってくると、次々と話題を出してくる。理由は、次にいつ会話ができるかわからない不安感があるためだ。会話が長くなると今度は家族側の負担が大きくなってしまう。

このシステムを利用することで、定期的に会話ができるようになるので、短い時間でも十分であると考ええる。

このように、この装置を定期的な家族間のコミュニケーションツールとして提供したい。

3. 現状と発展

このシステムは定期的なコミュニケーションを目的としており、高齢者とその家族が話しやすくなる環境が作られる。

現在の試作システムでは、Skype を利しており、センサが反応してから通話を接続するまでに数秒のラグがある。そのため、現状のシステムとは別の高速なシステムを検討する。